統一教の喪葬儀礼に対する統一思想的考察

ヤン・ピョンスン(鮮文大)

目　次

1. はじめに
2. 統一教の喪葬儀礼に対する統一思想的根拠
1) 神の属性に対する観点
2) 人間の属性に対する観点
3) 霊界に対する原理的な観点
3. 統一教の喪葬儀礼としての昇華式の理解
1) 生と死に対する理解
2) 喪葬儀礼としての昇華式
3) 昇華式の手順
4. あとがき

1. はじめに

人間の死について確実な 3 点と,不確実な次の 3 点があるという。まず、確実な 3 点は必ず死ぬ。一人で死ぬ。そして手ぶらで死ぬという事実だ。不確実な 3 点は、いつ死ぬか分からない。どのように死ぬか分からない。そして、どこで死ぬか分からないという事実だ。[11] このように死について確実な部分もあるが、不確実な内容もある。そこで、古今東西を通じて死は、多くの人々の関心の対象となっており、特に数多くの宗教は生と死と喪葬儀礼の関心が大きい。

元来、生と死は相反する概念であるが、死をどのように見るかによって、死の意味が大きく変わる。死に対する見解の違いは、死者に対する儀礼過程の構造的な違いを見せる。死への認識体系が具体的に分極（劇化）されて表されるのが喪葬儀礼だ。

孔子は大事に愛していた弟子の顔回が世を去り大きく悲しんで号泣した。一方、荘子は、自分の妻がこの世を去ると踊りを踊った。儒家の葬儀は、死んでこれに対する別れを告げる儀式で、悲しみを表す過程でもある。荘子がみる死は、原初的な自然への帰依を意味する。なので悲しむことはない。荘子の踊り自体は死んだ者の自然への帰依に対する一つの分極された儀式である。仏教では死んだ者のために 49 日間、天道（薦度）祭を過ごす。死は、現

---

[1] 『結婚祝福と昇華祝福の意義』講議案抜粋（韓国協会本部の講議案）.

生との別れだが、もう一つの生命体が転生して戻ってくるものと信じるので、魂を離れて過ごす儀式と、新たに迎える儀式が一緒に行われる。[2)]

統一教は 1954 年に文鮮明先生によって創始されて以来、この半世紀余りの間、抑圧と迫害の中でも屈することなく、世界的な宗教の基盤を成し遂げた。そして、統一教は、神の救いの摂理から天宙の真の父母であられる神様を解放させ、親の位置を探してさし上げ死亡圏で苦しむ人類を救い、神の懐に戻してさし上げる、地上天国創建の道を歩んできた。

特に、統一教の儀式の構成と、体系は統一教の教義である原理講論 [3)]と統一思想 [4)]、そして文鮮明先生御言葉選集 [5)]を根幹にして形成されており、喪葬儀礼である昇華式は統一教の儀式の中核を成している。

本研究では、まず統一教の喪葬儀礼に対する統一思想的根拠を統一原理と統一思想で探し、統一教の喪葬儀礼として昇華式を理解するために、統一教の生と死についての内容と喪葬儀礼として昇華式の性質、内容、手順を考察してみようと思う。

2. 統一教の喪葬儀礼に対する統一思想的根拠

1) 神の属性に対する観点

統一思想は、人類のすべての難題を根本的に解決し、人類を永遠に救うために出現した思想である。ところが、そのような難題の根本的な解決は、神の属性について正確に、また十分に理解することによってのみ可能なのだ。[6)]

そこで、統一思想はこのような神の属性を神性と神相という概念で説明しながら、現実問題（人生問題、社会問題、歴史問題、世界問題）の根本的な解決が可能だとみる。[7)]
統一思想で説明する、神の神相とは二種類の二性性相（性相･形状と陽性･陰性）と個別相をいい、神の神性とは、心情、ロゴス、創造性をいっている。[8)]もう少し具体的に説明する神相は、神の属性のうち"体"の側面をいう。神は人間の目には見えないが、一定の体や形になることができる可能性（素材）、規定性を持っている。これがすなわち、神相である。この

---

2) パク・グァンス、「仏教の節度儀礼」、『宗教と儀礼』（日韓宗教研究フォーラム第3回国際学術会議、2005）、p.33.

3) 世界基督教統一神霊協会、"原理講論"、（ソウル：成和出版社、1999）.

4) 統一思想研究院、"統一思想"、（ソウル：成和出版社、1999）.

5) "文鮮明先生御言葉選集"は、統一教会の創立以来、先生のみ言を編纂した本で、現在1,200巻の御言葉選集が出版された。

6) 統一思想研究院、"統一思想"、p.29.

7) 同本、p.29-30.

8) 同本、p30.

神相に性相と形状、陽性と陰性の二種類の二性性相と、個々相がある。[9]次に、神性は、前述したように、"体"の側面からだけでなく、機能、性質、能力の側面もある。これが神性だ。

従来のキリスト教やイスラームで言う全知、全能、遍在性、至善、至真、至美、公義、愛、創造主、審判主、ロゴスなどは、そのままの可能性に関する概念であり、統一思想も、もちろん、これらの概念を神性の表現として認めている。[10]

しかし、現実問題の解決という観点から見ると、これらの概念は、性相の側面を扱っていないという点だけでなく、多くの創造に直接関連する内容が含まれていないという点で、そのままでは現実問題の解決に大きな助けを与えることができない。統一思想は、現実問題の解決に直接関連する神性としての心情、ロゴス、創造性の三つを挙げている。この中で特に心情が最も重要であり、これはこれまで、どの宗教も扱っていなかった神性だという。[11]

そこで、統一教は、神は心情の存在であると断言する。対象に愛を施すときに喜びを感じる、情的な衝動と定義されている心情は、神の神性の核心だけでなく、創造の背後にある究極的な特性である。心情の目的は、神が人間に与えられた三大祝福を実現することにある。心情の結果は、喜びであり、それは対象と主体の理想を十分に反映しはじめた時に表れる。統一原理によれば、神は自分の属性の中核として心情を持っているので、自分の対象として人間を、人間の対象として、宇宙を創造せざるを得なかったのである。[12]

2) 人間の属性に対する統一思想的観点

統一思想は、キリスト教の聖書に立脚して、神が宇宙と人間を彼自身に似せて創造したという前提から出発する。[13]したがって、人間と自然は切っても切れない密接なつながりを持っている。また、存在界の原因は神なので存在の根源は神である。したがって、存在界は、神の創造から始まる。ところが、神の創造は、単に制作者の立場に留まらないというのが統一思想の見解である。すなわち、被造世界は神の心情を動機とした創造による結果である。神の創造は、偶発的または自然発生的なものではなく、ある必然的な動機によって行われたということだ。[14]

また、神が創造した被造物の中で、人間と万物はどのような存在であり、どのような関係にあるのか？統一教の原理講論によれば、被造世界は、無形の主体としておられる神の二性性相が、創造原理によって象徴的、または形象的な実体として分立された個性真理体 [15]と

---

[9] 同本、p30.

[10] 同本、p.57.

[11] 同本、p.58.

[12] サイモンベデロ、「環境破壊は防げるのか」、『統一思想論叢』11集（アサン：鮮文大出版部、2003）、p. 247.

[13] 統一思想研究院『統一思想』、p.31.

[14] 同本、 p.74

[15] 同本、 p.170－175.

して構成されている実体対象[16]である。万物と人間は皆、神の被造物がすべてのものは、象徴的な実体対象であり、人間は、形状的な実体対象である。そして、人間は万物世界を総合した"小宇宙"といわれる。そして、神が創造の理想として見た人間の本然の姿は、神と同じような感情を共有し、神の創造性を与えられた存在であり、良い家庭を築くことができ、万物の主管主としての資格を持つ存在である。[17]神が人間に下された創造性と主管性は、心情に土台を置いているという事実が重要である。

特に、統一思想は、万物の一つ一つの個体を存在者（existing being）とし、存在者についての説明は、"個性真理体"と"連体"という概念で区分し説明している。[18]

ここで個性真理体とは神の属性、すなわち、原相の内容にそのまま似ている個体をいうもので、一つの個体に対して、他の個体との関係を考えず、独立して扱うときの被造物をいう。しかし、実際にすべての個体（存在者）は、相互に密接な関係を結んで存在している。そして、ある個体を別の個体との関係から見るとき、それらの一つ一つの被造物を連体という。そのため、連体は、相互関連性を持った個性真理体をいう。被造物（存在者）は、神に似せて創造されたので、すべての被造物の姿は神相に類似している。しかし、神相には、普遍相と個別相があるので、すべての個体は、原状に似て、普遍相と個別相を持っている。ここで、普遍相とは性相の形状、および陽性と陰性をいい、個別相は、個体ごとに持っている特性をいう。[19]

すべての被造物は、まず、原相に似ている属性、すなわち、性相と形状の二つの側面を持っている。性相は、機能や性質など、目に見えない無形の側面であり、形状は質料と構造、形態などの有形的な側面である。まず、鉱物における性相は、物理化学的な作用性であり、形状は原子や分子によって構成された物質の構造、形態などである。植物には、植物特有の性相や形状がある。植物の性相は生命であり、形状は、細胞と細胞によって構成される組織、構造、すなわち、植物の形態である。生命は、形態の中に潜在している意識として、目的性と方向性を持っている。そして、生命の機能は、植物の形を制御しながら成長させていく能力、すなわち自律性なのである。

植物はこのような植物特有の性相と形状を保ちながら、同時に鉱物の次元の性相的要素と形状的要素も含まれている。植物は鉱物質も含まれているからだ。動物には、植物の次元よりも高い動物特有の性相と形状がある。動物の性相とは本能をいう。そして、動物の形状は、感覚器官や神経などの構造と形態などである。動物もまた、鉱物質を持っており、鉱物の次元の性相や形状を内包しており、また、植物の次元の性相や形状も内包している。動物の細胞や組織はすべて、これらの植物の次元で作用しているのだ。人間は霊人体と肉身で構成された二重的存在である。したがって、人間は動物の次元よりも高い特有の性相と形状を持っ

---

16) 全国大学原理研究会『統一原理教材』、（ソウル：成和出版社、1988）、p.20.

17) チェ・ビョンファン、『哲学の諸問題と統一思想』、（アサン：鮮文大出版社、2005）、p.134.

18) 統一思想研究院、"統一思想"、p.169.

19) 同本、 p.169

ている。人間の特有な性相とは、霊人体の心である生心であり、独特な形状とは、霊人体の体である霊体です。そして、人間の肉身においての性相は肉心で、形状は肉体です。

ところで、人間の肉体の中にも鉱物質が含まれている。したがって、人間は、鉱物の次元の性相と形状を持っている。また、人間は、細胞や組織になっており、植物の次元の性相や形状も持っている。また、動物と同じように、人間は感覚器官と神経を含む構造と形態を持っていて、動物の性相や形状も一緒に持っている。人**間**の中にある動物次元の性相、すなわち、本能の心を肉心と呼び、霊人体の心を生心という。こうして、人間の心は、本能としての肉心と霊体の心である生心で構成されている。ここで肉心の機能は、衣･食･住･性の生活を追求し、生心の機能は、真･善･美･**愛**の価値を追求する。この肉心と生心が合成一体化したものが、人間の本然の心（本心）である。[20)]

ここでは、人間の霊人体について説明しようと思う。肉身は、万物と同一な要素でなっており、一定の期間内でのみ生存する。一方、霊人体は、肉眼で見ることができない精神的な要素になっていて永遠に生存し、その姿は、肉体と違いがない。肉体が死ぬと、まるで古い衣服を脱いで捨てるように、霊人体は肉体を脱ぎ捨て、霊界に入り、その場所で永遠に生きる。一方、霊人体も、性相と形状の二性性相になっており、霊人体の性相（心）は、生心であり、形状（体）は霊体である。霊人体の感性は、肉体生活の中で、肉体との相対関係で発達する。つまり、霊人体の感性は、肉身を土台とし成長する。したがって、人間が地上で神の愛を実践してから他界すると、霊人体は霊界の充満した愛の中で、永遠に喜びの生活を営むことになる。しかし、逆に、地上で悪なる生活をすれば死後には、邪悪な霊に留まり苦痛の生活をすることになる。

このように、人間は鉱物、植物、動物の性相と形状の両方を持っている。そして、その土台の上に、さらに次元の高い性相と形状、すなわち、霊人体の性相や形状までも持っている。したがって、人間は万物の要素を総合的に持っているため、人間を万物の総合実体相、または小宇宙と呼ぶ。以上の説明では鉱物、植物、動物、人間に存在者の格が高くなるに応じて相と形状の内容が階層的に増大していることがわかる。これを"存在者における性相と形状の階層的構造"という。[21)]

したがって、人間は一定の期間だけ、地上で生きて肉身が死ぬと、霊人体は、肉体を脱ぎ捨て、霊界に入って永遠に生きるのが天の道理なのである。

3) 霊界に対する原理的観点

霊界は、肉身の目で見ることができず、簡単に認識できないが、人間は、いつの日か誰もが行かなければならない所である。文鮮明先生は、霊界について知ることは、神を知ることの次に重要だと教える。その霊界の 3 つの主題が、ここで提示される。まず、霊界を知るこ

---

20) 同本、 p.170－171.

21) 同本、 p.171－172.

とは、地上生活の中で、正しい方向を発見し、維持するうえで重要となる。第二に、霊界では相似関係で地上世界と対応して地上生活の中で培った生活の質と愛を維持する。霊界での調和や不調和は、地上の生活の中でいろいろな性格や偏見の中の人生を包んだ人々の愛や愛の欠如に起因する。第三に、霊界は、様々な社会と領域で構成されており、今日では一つの全体的な天国に統一されている最中だ[22]という。

このような点で霊界とは死後の世界や来世を意味している統一教だけの用語として、統一教の信仰の中心的なモチーフを形成している。このため、統一教の死に対する理解の根本は、霊界への理解から始まったと見られる。

もう少し具体的に説明すると、霊界とは、霊人体が肉身を脱いで、神様に帰依し永遠に生きる世界をいう。物質的な欲望や恨み、憎しみが断絶された人間を創造した神の創造の原則が適用される世界をいう。また、霊界とは人間が生活を営むの有形実体世界と、死者の世界である無形実体世界のうち、無形実体世界をいう。被造世界は神の二性性相に似ている人間を見本にして創造されたので、すべての存在は、心と体でできた人間の基本型に似ていないものがない。したがって、被造世界には人間の体と同じ有形実体世界だけがあるのではなく、その主体としての人間の心のような無形実体世界がある。この有形、無形の実体世界を合わせたものを天宙と呼ぶ。無形世界は、主体の世界であり有形世界は、対象の世界であり、後者は前者の影のようなものである。有形世界で生活していた人間が肉身を脱げば、その霊人体は無形世界に行って永住することになる。[23]

つまり、精神的なものが物質的な事の本質になる。そのような基盤の上に、人格の完成は、霊的な側面と肉的な側面の完成が同時に成されるのだ。従って個人の修行、善行、共通善の実践を通じた霊人体の成長と完成が霊界の生活の中心となる。

元来、神はご自身のかたちに人を創造され（創世記 1：27）、その鼻に吹き入れて（創世記 2：7）生命になるようにし、肉身を使って、この地で生きて肉身は、土に戻り、霊人体は、霊界で永世するとみる。そうならば、その霊人体は、どのように成長し、完成するのだろうか。まず、霊人体の成長と完成[24]は肉身生活を基盤として成される。

また、統一教の観点では、死者の魂がどのような状態で霊界に行くのだろうか？という質問に対して、"再臨復活"[25]という独特の用語で表現している。統一教でいう復活とは、死か

---

22) 世界経典編纂委員会『世界経典』II、（ソウル：世界平和連合フェラゴンハウス、2010）、p.185。

23) 『原理講論』、p.63

24) 統一原理によれば、人間には神の二性性相に似て目に見えない部分の性相と、目に見える一定の形態と形を持つ形状が存在する。性相的な部分が霊人体に相当し、形状的な部分が、肉身に相当する。また、統一教の教義体系では霊人体の完成のために、肉身生活の尊さを強調される。その理由は、肉身生活の価値に応じて、霊界の人生が決定されるからだ。人間の霊人体の完成は、人生の悟りと実践につながらなければならないということを意味する。霊人体の成長は、肉身が生存している間、個々人の生活の様態、価値、悟りに対する実践と関連して成される。つまり、個々人が生涯に自ら行ったすべての行為がどれだけ善か悪かによって、来世の人生が決定される。（『原理講論』、pp.21～27参照）

25) 霊人たちが復活するためには、生きている地上人に再臨して、肉身生活の間、果たせなかったことを成すこ

ら再度存続することを意味する。これは、肉身の復活を意味するのではなく、堕落に起因する死の状態から直接、神様の主管圏に復帰されていく過程的な現象をいう。自分の人生を悔い改めて、より浄化された姿で生まれかわるとき、それだけ復活したことになる。そのため、統一教の来世観は、現実の生活を基盤としている現世中心的な性格を表している。統一教の信者にとって現世の生活は絶え間なく永遠の来世の人生を準備するための準備期間にすぎない。[26] 現世の人生は神への認識と、地上天国の実現を追求することだ。永遠の人生を準備するための前段階の人生とし、現世の生活は一種のろ過装置と異なるところがない。このため、人間の責任性とし表現される地上人の責任ある生活態度と目的は、罪との葛藤、憎しみと恨みのない永遠の世界への回帰を志向する。統一教の信者たちは、責任のある現世の生活の実現のために神と人間の合一として成される理想世界の実現に興味を持っている。統一教では、人間の責任分担を介して実現される理想世界を"地上天国"だという。死後の状態として、霊界は愛の心を中心とする境界線のない自由な状態と描写されている。境界線がない自由な状態とは、人間の五感の機能のように霊的にすぐに感知可能権を体験する空間をいうのである。[27]

このような観点からすると霊界は、神の愛で動く巨大な有機体である。永遠なる神の愛を中心に創造される巨大な宇宙であり、原形である。神と人間との合一、人間と人間、人間と自然の合一が成される理想の状態を想定する。このような理想の世界を天上天国だという。なので、天上天国とは、人間の精神の故郷と描写される。

前述のように、統一教の霊界に対する理解は、死の永遠の人生を準備するための新しい玄関口として認識している事実が根幹となっている。また、霊界は天上天国を意味し、死後の世界を意味する。

3. 統一教の喪葬儀礼としての昇華式の理解

1) 生と死に対する理解

統一教の死生観についての理解は、2 つの意味を持っている。一つは、肉体の命が途切れることを意味する物理的な死を挙げることができ、また他の一つは、人間始祖の堕落によってもたらされた死として霊的な死が挙げられる。[28]ところが、統一教の教義体系では、霊的な死についての考察が、教義の中心を形成している。

とで成長する。このような過程を統一教では、霊たちの再臨復活と描写する。霊人たちが地上人に再臨復活する方法は、霊人たちと地上人の霊人体が霊的相対基準を造成し、様々な役事を行なうことだ。悪霊人が自分が行った罪ほどの苦痛と相対基準が一致している地上人に再臨復活して協助することで、地上人は、蕩減条件を立てていくということだ。（『原理講論』、pp。199ー205参照）

26) 世界基督教統一神霊協会、『地上生活と霊界』上、（ソウル：成和出版社、2000）、pp。51ー66.

27) 『地上生活と霊界』上、pp。 242ー258.

28) 世界基督教統一神霊協会、『原理講論』、p.182.

特に、原理講論では、死と人生について、聖書を中心に、次のように説明している。父親の葬儀をするために自分の家に行こうとする者に対し、イエスは死んだ者は死んだ者たちにによって葬儀をさせ、お前は行って、神の国を伝播するように言われた（ルカ 9 章 60 節）この言葉には、死と生について、それぞれ二つの異なる概念がある。

第一は、葬儀を行わなければならない、その弟子の父親のように肉身の命が失われた"死"に対する生死の概念である。このような死に対する"生"は、その肉身が、生理的な機能を維持している状態をいう。第二には、その亡くなった父親を葬儀するために集まって活動している人々を指摘して言う"死"に対する生死の概念である。ここで、肉身が活動して葬儀を行い、肉身が生きている人々に死んでいる者とみなすということだ。その理由は、イエスを裏切ることによって神の愛を離れてしまった立場、すなわちサタンの主管圏にとどまっていたからだったと思われる。[29)]

> "この死は肉体の命が失われた死をいったのではなく、神の愛の懐を離れサタン主管権内に落ちたことを意味する死をいうのである。したがって、これらの"死"に対する"生"の意味は、神の愛の主管権の中で、彼のみ意のままに活動している状態をいうのである。したがって、いくらその肉体が活動をしているとしても、それが神様の主管圏を超えて、サタンの主管権内にとどまっていると、彼は創造本然の価値基準から見て、死者でないわけがないということである。これは非信仰的なサルデスの教会の信徒たちに、あなたが生きているというのは名ばかりで、実は死んでいる。そのみ言を見てもよくわかる（ヨハネの黙示録 3 章 1 節）。その一方で、すでに肉身の命が失われた人間誰であっても、そのヨハネ界人体ガ霊界ヨハネ天上天国で神様の愛の主管権内にある場合、彼はどこまでも生きている人である。イエスがわたしを信じる者は死んでも生きる（ヨハネによる福音書 11：25）というみ言に対するイエスを信じ、神様の主管権の中で生きる人は、命が失われ、その肉体は土に帰っても、その霊人体はまだ神様の主管権内にあるので、彼は生きている人だということだ。"[30)]

死後の世界について、人間の堕落がなかったとすれば、人間の霊的な五感が生きていて地上人に会うかのように人間は死んだ霊人と自由に会えるとされる。ここに統一教が理解している死の一面を発見することができる。これは、統一教人たちが死を現世との断絶と理解することなく、死後の永遠の生が存在するという観念を持っているという事実である。死は永遠の別れを意味するものではない。現世での人生が終わった後に迎える死後の人生は永遠の幸せ、安楽をもたらすものと理解している。

---

29) 同本、p.182.

30) 同本、p. 182-183

人間が完成して生活して老衰した後、肉身を脱いでいくその霊人の世界がどれだけ美しく幸せなのかを知れば、むしろ肉身を脱いで、その世界に行ける日を慕い、待ちわびるだろう[31)]と述べている。

ところが、これらの両方の死の理解の中で肉身の限界性が消滅する物理的な死は、人間の堕落によって発生する死を意味しない。人間始祖の堕落による霊的な死は、善悪の果をとって食べると間違いなく死ぬであろうとされた死である（創世記 2 章 17 節）。したがって、人間始祖の堕落によってもたらされた霊的な死とは、神様からサタン主管圏に転移したことを意味する。このような観点から、死とは肉身の活動が停止した状態で、肉体的死を迎えても神との一体、一合の状態にある生は、神様の主管圏にあるため、人間の霊人体は、永遠に死なないということだ。人間の肉体的死は、人間の永遠の生とは無関係だということを意味する。すなわち、死とは、神様の善主管圏から、サタンが主管する悪主管圏に移る状態をいう。

肉身が途絶えた人間だとしても、霊人体は霊界の天上天国で神様の愛の主管圏内にある場合は、どこまでも生きている人である。[32)]

そのため、統一教でいう死は生命の断絶を意味する肉体的な死の制約性を意味するのではなく、精神的な死を意味することを知ることができる。死後の状態を、神の愛を体恤した霊的な状態への回帰だとみる。したがって、原理講論に現れた死の理解は、死生観を超越した永遠の生命の故郷への回帰にあると見ることができる。特に、統一教が主張している死と生についての理解において、その特徴を要約すると以下の通りである。

第一に、統一教での死とは永遠の故郷への回帰を意味する。文鮮明先生は、永遠の本郷の世界をこのように説明している。

"私達はこの地上で生きているが、この世界は地上だけのものではなく、霊界もあることを知っています。間違いなく霊界はあるのです。そして、この地上と霊界は、全く違う二つの世界ではなく、一つの世界として接続されています。したがって、私たち人間は、いずれにしても、霊界から生まれたため、再び霊界に帰らないわけにはいかないのです。韓国語では、面白い表現として死ぬことを帰るという言葉で使用します。元来、人生が出発した本来の住まいに帰ることを意味します。遠い遠い歴史の起源を越えて帰るという意味です"[33)]と説明している。

第二に、統一教は、個々人の一生は死後に迎える永遠の世界を準備する期間であり、死を迎える瞬間に格別な意味を付与している。 "人生個々人の生を見れば、三段階の人生を簡単に知ることができる。第 1 段階は、生命が受胎することを受け、10 ヶ月という長くて短い期間を母親胎内で過ごし、第二段階である地上の人生として、100 年前後の人生を生きて第 3 段階は、まさに人間が完成し、入って生きる永生の世界、すなわち霊界です。堕落した後

---

31) 同本、 p.185.

32) 同本、 p.183.

33) 世界基督教統一神霊協会、『真の家庭と世界平和』（ソウル：成和出版社、2000）、p.255-256.

孫である人間としては想像できない未知の世界です。"[34]まさにその世界は時空を超越して生きる世界で、腹中の胎児が地上界を想像することができないように、地上界で空気を呼吸して生きる肉身を用いた人間では霊人体で生まれ、真の愛を呼吸して暮らす世界を想像できないのだ。

第三に、統一教での死は、価値のある人生を経験した地上の人にとって願望の瞬間であり、希望の瞬間とみるという点だ。

文鮮明先生は、死という単語を昇華という言葉で表現しながら、統一教の死についての説明は、永遠の命の故郷を迎える過程とみて真剣に仕上げている傾向が強い。したがって、彼らは神のみ旨である地上天国の実現に個々人の努力と情熱、そして個々人の責任分担を果たすかどうかに応じて、霊界では自分たちの人生が決まるとみる。なので死に対する恐怖心や恐れ、葛藤を見つけ難く、むしろ地上人の人生がために生きる人生という基準に一致したのかを置いて臨終を準備しなければならない。

第四に、すべての人間は、誰彼を問わず、重生、復活、永生の 3 段階を経て生まれてこそ完成した人生を送ることができるようになるものとみなす。[35]言い換えれば、重生は個人的基準の生まれ変わりであり、復活は家庭的基準の生まれ変わりであり、永生は、世界的基準で全人類が共に完成し、地上天国と天上天国を創建し、神様の祖国で永生することを強調している。

第五に、統一教でいう死は生命の断絶だけを意味しない。つまり、肉体的な死の制約性を意味するのではなく、霊的な死を意味している。なので死後の状態を、神の愛を体恤する霊的な状態の回帰と見ると、原理講論でいう死の理解は、死生観を超越した永遠の生命の故郷に帰るものと見られる。この点で、統一教の死生観は韓国的な死生観の基本的な枠組みと一脈相通すると考えられる。

2) 喪葬儀礼としての昇華式

我が国は、1 年の間に死亡する人口が約 24 万人程度で、一日に平均約 700 人が死亡する。[36]このように多くの人が生まれて、人生を生きるが最後に通過する関門がまさに死である。したがって、これらの死に対して持っている認識は、人ごと、文化ごと、宗教ごとに異なる。そのために死を迎えて表れる儀式も同様に多様になっている。特に儀式は、外部に打ち出された定型化された行動であり、宗教的な実践体系の一つであると見たとき、現在の韓国社会の新宗教の一つである統一教の死の儀式を調べることにより、統一教の儀式が持つ社会文化的な性格に注目したい。特に統一教の死の儀

---

34) このみ言は、去る3月18日と4月1日、ニューヨークとワシントンで開催された"統一昇華祭記念大会"時、文鮮明先生が語られた講演文の一部である。

35) 2010年3月18日と4月1日、ニューヨークとワシントンDCで開催された"統一昇華祭記念大会"のみ言.

36) 国家統計ポータルhttp://www.kosis.kr/参照.

式である昇華式は統一教の死生観と密接に関連しており、韓国社会の既成宗教の死の儀式の枠組みを超えた破格的な内容であることを先に明らかにしたい。

まず、統一教は人生の生を終了して、死んで葬儀をする意識の全体を昇華式と呼ばれる独特の用語を使用している。

文鮮明先生は、"昇華"の意味を先生の御言葉集で、次のように説明している。

> 死に直面すれば、人間は恐れ多くなります。恐怖を感じるようになります。それは、死が何を意味するのかわからないからです。不幸にも人類の歴史が六千年を経てきながらも、誰一人として死に対する真実を明らかに教えてくれた人がいませんでした。しかし、今、歴史の終末期になり、人類の真の父母が初めてその天の秘密を明らかにしてくださったのです。皆様、死という単語は神聖な言葉です。悲しみと苦痛の代名詞ではありません。なので真の父母様がその単語を"昇華"に変えて発表しました。地上界の人生を花咲かせ、実を結び、穀物を抱いて歓喜と勝利の世界に入る時が霊界入門の瞬間です。涙を流してあげるべき時です。昇華式とはこのように神聖で崇高な儀式です。神様の懐に入って侍り、永生を楽しみに行く第一歩だからです。花嫁がお嫁に行く時よりも震えて興奮すべき時です。[37)]

このように、昇華式は従来の葬儀文化の枠を超えた内容を持っており、私達はなぜ死を恐れているかについて説明している。

一方、原理講論によると、人間は肉身と霊人体でなっており、地上で、肉身生活をしながら霊人体が完成し、生霊体を成し遂げた後、肉身を脱いで、永遠なる無形実体世界で永生するようになっている。また、霊界は、初めから、神が用意された本体の世界で、霊人体が永生することができる所だ。その世界は、地上よりも次元が高く、完全無欠な本体の世界なので昇華は、そこに帰ることなので、昇りであり、より良いものと華するものとみなす。

このような意味で、統一教の死の儀式を"昇華"とし、その意識を、"昇華式"と呼ぶのだ。その結果、昇華の瞬間は、霊界で永遠の人生を左右する重要な瞬間であり、新しい誕生を意味するので式場や進行の程度も薄暗く、寂しくないように、明るく美しく準備してお別れする雰囲気にして、サタンが讒訴することができない、原理的な儀式にしなければならない。[38)]

実際、世間では、死は生命が終わることを意味するが、統一教での死は別の世界で新た生まれることを意味している。そのため、統一教信者は、死を嘆いたり、ふさぎ込んではならないという。そして昇華式は、新しい第 2 の宇宙的な母の胎内から別の世界で誕生するのである。そのため、人が死ぬといって、決して永久に去るのではなく、新たな存在として、新たな本質に帰るのが昇華式である。[39)]なので統一教の昇華式の遺体安置所は色がある花輪も陳列されており、遺影の写真も、白い色のリボンを使用して、参加者も黒ネクタイの代わりに白いネクタイを着用して弔問をする。薄暗い雰囲気ではなく、華やかで明るい雰囲気で葬

---

37) 天地人真の父母定着実体み言宣布大会（2011年4月24日、仁川松島コンベンシア）

38) ヤン・ピョンスン、『教会儀式の研究』、（アサン：鮮文大出版部、2006）、p.25.

39) 同本、 pp.75-90

儀室を用意している。特に、昇華式を準備する関係者は、昇華された方は決して永遠に去っていくのではなく、新たな存在として生を祝福してくれる厳かな昇華式場になるようにする。

特に、統一教の喪葬儀式である昇華式は、一般的な葬儀とは多くの点で似ている点もあるがいくつかの特徴を持っている。

第一に、用語の特徴である。統一教の喪葬儀礼の全体を昇華式とし、死体を清め経かたびらを着せる儀式を入殿式、出棺する儀式を昇華式、下棺する儀式を元殿式と呼ぶ。

第二に、昇華式の態度と雰囲気だ。統一教の原理では、霊界では、初めから、神が用意された本体の世界で、霊人体が永生することができる地上よりも次元が高く、完全無欠な本然の世界なので、統一教では、昇華といい、その儀式を昇華式とする。このため、昇華の瞬間は、霊界から見れば永遠の人生を左右する重要な瞬間であり、昇華式は、世の終わりという概念よりは、新しい世界に向かっていく希望を持たせている。故に、昇華式場の雰囲気は、通常の葬儀場では見られない、明るく厳粛な雰囲気になるようにする。

第三に、統一教は、人生の生を三部分に区分して説明している。まず、母親の服中で 10ヶ月、地上で 100 年の生命、そして霊界で永遠の生活という 3 段階の人生を規定しており、昇華は、まさに 3 番目の段階である霊界での生を出発する儀式と規定している。このため、昇華式は、新しい誕生を意味するので式場や進行過程も薄暗く、寂しくないように明るく美しく準備をしてお別れする雰囲気で昇華式を進行する。

第四に、統一教の昇華式（出棺式）の特徴を見ると以下の通りである。伝統的な儀式では、永遠に決別する告別式（永**訣**式）という意味で進行され、キリスト教の葬儀は、死者が天国に行けると信じて復活を前提としている。そして葬儀自体が礼拝の中心、または参加者中心の儀式とし行われる。つまり、参加者に悲しみと苦痛を慰労し、復活を信じて希望を持たせることにある。しかし、統一教の昇華式は、参加者のための儀式ではなく、死者が肉身と霊人体に分離され霊人体がより高い次元の霊界に昇華して行くようにする儀式である。そのため、儀式自体は、進行者や参加者中心ではなく、昇華者のために、神の導きで本然の世界に定着するように依頼して、精誠を尽くして祈る神聖な儀式だ。

第五に、統一教の昇華式の特徴は、統一教の霊界に対する理解を背景にしている。その霊界は、神の愛で動く巨大な有機体とされる。そして、永遠なる神の愛を中心に創造される巨大な宇宙であり、原形である。神と人間の合一、人間と人間、人間と自然の合一が成される理想の状態を想定しているという点だ。このような理想の世界が天上天国であり、人間の精神の故郷とし描写されている。そのため、統一教の昇華式はこれらの点を背景に、死と永遠の生を準備するための新しい玄関口として認識している。

最後に、伝統的な死の儀式の場合、自然で当然のことと思われる、通常の死と、自然でなく、当然でなくて、危険に受け入れられている異常な死がある。一般的に、好喪と悪喪と呼ばれる通常の死と異常死が区分される。これら二つの死の喪葬儀礼の手順は、互いに違いがあり、それぞれの死に対する人々の態度も違う。ここで、統一教の場合は、通常の死や異常

死を区別しないで、同じ基準で昇華式を進行する。ただし、昇華式以後、異常死の場合、故人の保護者が特別な精誠と祈りによって解恩儀式を持ったりする。

3) 昇華式の手順

昇華式は、従来の葬儀（葬礼式）や告別式（永訣式）のように悲痛と悲しみの儀式ではなく、新しい出発を記念して祝う儀式として、常に慎ましく美しい喪葬儀礼（喪葬礼）になるように執礼者は、最善を尽くさなければならない。昇華式は 4 段階で行われるが、その全体を昇華式と呼ぶ。（病院で昇華式を進行する場合、帰還式が省略される）まず、元殿式のための準備段階として、永遠の家に仕える入殿式があり、直系家族を離れ、天国に帰る式、つまり、お別れの挨拶を交わす帰還式があり、家族や友人たちが天国に上がる魂のために行われる昇華式がある。そして、本殿に位置する元殿式がある。

(1) 入殿式

統一教の葬礼で入殿式は、伝統的な葬礼は入棺式と呼ぶ。入殿式は元殿式のために準備する段階である。用意するものは、寿衣（ズボン、上着、着物、礼服）、棺、障子紙、銘旗、教旗、ロープ、アルコール（消毒薬）、聖塩 [40]、遺影、脱脂綿、はさみ、爪きり、アルコールを入れる器、くし、化粧品、おむつの布、トイレットペーパー等が必要である。
入殿式は、通常、昇華してから 24 時間が過ぎて [41] 執礼者の主管の下で実施し、補助する人が 3、4 人は必要だ。賛美、祈り、焼香、聖書の奉読とみ言と祈り、賛美歌、黙祷と閉会の順に実施して執礼者は、礼拝が終わって棺を封じる前に、祈りの気持ちで解恩のみ言をしてあげる。昇華者と生時にわだかまりがあればすべて解いていくものであり、送る家族も同じようにすべてを解いてお送るという内容だ。特に、統一教の入殿式の一つの特徴は、故人を過度に丹念に結ばず生きている方を祀るかのように真心を尽くして入殿式を実施する。

(2) 帰還式

肉親や知人、あるいは親戚との別れの式である帰還式は、通常、祝福された人の家族が昇華した、自宅や病院などに奉安所で進行する。通常、この儀式は昇華式場に行く前、昇華式

---

[40] 聖塩は、統一教の聖別儀式の一つで、1960年3月16日、文鮮明先生ご聖婚された日から使用されている。聖塩による聖別儀式の意味は、人間の堕落によって、私たちが生きている環境が、まだ理想的なものでないため、その環境とすべてのものを清めるために、聖塩をつくられたのだ。（『教会の儀式の研究』、p.43.）

[41] 死は臨床的に心臓の鼓動の停止と判断するが、医学的には完全な死とは、肺死、心臓死、脳死と併せて細胞死までをいう。つまり、医学的な死の前には霊人体が再び戻ってきて存続する場合があるからであり、遠距離にいる遺族と対面できる最小限の時間でもある。韓国の伝統的な葬儀でも、一日が過ぎた後に入棺式をする。

を行う前に持つようになり、儀式は、棺のふたを開けたまま進行する。通常、帰還式は、必要な場合もあり、必要としない場合もあるが、大抵の場合は省略する。一般的な葬儀の儀式には、帰還式がない。
式順は、黙祷、焼香、祈り、上食、黙祷、閉会の順で進行し、帰還式が終わると昇華場に奉送する。奉送要員は、8ー12 人の男性で、服装は、黒、あるいは紺のスーツ、白いワイシャツ、白いネクタイ、白い手袋を着用する。奉送過程は、先頭に聖塩を持った執礼者が聖別しながら、先行して、その後ろに遺影が伴い、続いて奉送要員が奉送をする。

(3) 昇華式

統一教の昇華式の順序を葬儀では、出棺と呼ぶ。昇華式の祭壇は、新しく用意した白の明るい布で祭壇の上を覆う。遺影は普段、撮影した写真の中から良いものを選んで、16 x20 インチ程度に拡大する。特別なのは、葬儀では遺影に黒いリボンや造花（原色）を使用するが、昇華式は、明るく輝く色を使用して、遺影にもピンクや白のリボンをかける。
昇華式の順序は、開会、賛美、祈り、焼香や献花、略歴報告、昇華の辞、送辞、送歌、賛美歌、祝祷の順に進行する。昇華式の参加者は、昇天する魂と最後の別れをする機会となる。このため、参加者は誠意を尽くして、尊敬の礼を表すとともに、故人に対する地上での努力と献身を記憶しなければならない

(4) 元殿式

統一教の元殿式は、葬儀では、下棺と呼ぶ。元殿式の準備のために治山要員は、あらかじめ定められた元殿地に行って穴を掘る元殿の準備をして執礼者は元殿地の周辺を聖別する。そして穴を和紙で覆い、元殿式の準備をしながら近くの適当なところに席を広げて、机を置いてロウソクを灯し線香をあげる。
元殿式の順序は、殿の底を均等に安置した後、殿と壁の間を土で埋めて整えた後、 銘旗と教旗で覆う。殿を安置している間、家族は引き続き聖歌を歌う。次に横帯を覆い整えた後、3 番目の横帯を開いたままで礼拝を捧げる。
元殿式順（下棺式順）は、開会、賛美歌、祈り、み言、献花、献土、祝祷、お知らせ、閉会の順で進行して礼拝が終わると治山要員は、残って仕上げ作業をしながら、元殿式が終わった後、家に帰って昇華式を締めくくる立場で家庭礼拝を捧げる。
この他にも臨終礼拝[42]、奉安所の準備[43]、上食[44]と三虞祭[45]などの手順がある。

---

42) クァク・ジョンファン、『礼法と儀礼、伝統』（ソウル：成和出版社、2001）pp.138-139.
43) ヤン・ピョンスン、『教会儀式の研究』、p.78。
44) クァク・ジョンファン、『礼法と儀礼、伝統』（ソウル：成和出版社、2001）pp.142
45) 元殿式の後3日目（式が開催された日を含む）の直系家族と、友人や親戚が元殿地を訪問する。最後の復活の儀式として、3日、追悼礼拝（ 三虞祭 ）を上げる。献花と焼香をしたり、簡単な食べ物を持っていって献呈する。礼拝順序は、一般的な礼拝の手順に従って行う。 （『礼法と儀礼、伝統"、pp.149-150）

4. あとがき

すべての宗教は最終的には宗教が持っている救い、または救世の内容は、儀式を通って現われている。特に、喪葬儀礼は人間の救いの問題と密接な関連を結んでいる。

本論文では、統一教の喪葬儀礼である昇華式の根拠を統一思想から考察するとした。まず、神の属性の観点からは、神は自らの属性の中核として心情を持っているので、自らの対象として人間を、人間の対象として宇宙を創造しないわけにはいかなかったという点だ。

次に、人間の属性の観点からは、肉身は、万物と同一の要素になっていて、一定期間の間だけ存続する。一方、霊人体は、その姿は、肉身と違うところがない。肉身が死ぬと、まるで古い衣服を脱いで捨てるように、霊人体は、肉体を脱ぎ捨て、霊界に入り、そこで永遠に生きるのが、天の道理である。

一方、霊界は神の愛で動く巨大な有機体である。そして、永遠なる神の愛を中心に創造された巨大な宇宙であり、原形である。その霊界は、神と人間の合一、人間と人間、人間と自然の合一が成される理想の状態を想定する。このような理想の世界を天上天国だという。そこで、天上天国とは、人間の精神の故郷と描写される。このような根拠の中で、統一教の昇華式を理解しようと、統一教の生と死に対する理解と統一教の喪葬儀礼である昇華式の内容と手順を詳細に記述した。

最近の統一教は、昇華式という彼らの喪葬儀礼は統一教だけの儀式ではなく、超宗教的、超教派的な喪葬儀礼として定着させるために努力している。なせならば、昇華式は、地上界の人生を花咲かせ、実を結び、穀物を抱いて歓喜と勝利の世界に入る時が霊界入門の瞬間であり、神の懐に入って侍り、永生を楽しみにいく第一歩だからだ。したがって、このように貴い永生への門を開くために、統一教の創始者である文鮮明先生は、2010 年 3 月 18 日、ニューヨークの国連本部で最近、永眠した世界的平和指導者たちに昇華式を施してくれた。[46)]

このように、統一教の喪葬儀礼である昇華式は、創造本然の世界で、すべての人類が望む理想世界に向けての貴重な儀式として、地上世界と天上世界を合わせる喪葬儀礼として多くの人々の関心が集中している。

---

46) 天地人真の父母定着実体み言宣布大会（2011年4月24日、仁川松島コンベンシア）

参考文献

1) 文鮮明先生御言葉編纂委員会, 『文鮮明先生御言葉選集』, ソウル：成和社, 1988.
2) パク・グンウォン　編, 『キリスト教と冠婚葬祭』, ソウル：ジョンマン社, 1984.
3) パク・グンウォン, 『牧会と教会儀式』, ソウル：図書出版　ジンチャン, 1997.
4) 世界キリスト教統一神霊協会, 『原理講論』, ソウル：成和出版社, 1999.
5) _____ , 『地上生活と霊界』上,下 , ソウル：成和出版社, 2000.
6) 世界平和統一家庭連合編, 『礼法と儀礼、伝統』, ソウル：成和出版社, 1997.
7) _____ , 『真の家庭と世界平和』, ソウル：成和出版社, 2000.
8) ヤン・ピョンスン,『教会儀式研究』, アサン：鮮文大出版部, 2001.
9) 歴史編纂委員会,『主要儀式と宣布式』 I ~Ⅳ, ソウル：成和出版社, 2001.
10) 歴史編纂委員会編, 『統一教会実録』, ソウル：成和出版社, 2007.
11) _____ ,『統一教主要儀式と記念日』, ソウル：成和出版社, 1997.
12) イ・ウンボン,『韓国人の死亡観』, ソウル：ソウル大出版部, 2001.
13) _____ , 『様々な宗教でみる死亡観』, ソウル：カトリック出版社, 1995.
14) イ・ジェウン, 『韓国人の死後の世界観』, 全州：全州大出版部, 2001.
15) イ・ハンニョン他, 『今後の世界と文鮮明先生の統一思想』, ソウル：図書出版　主流, 1986.
16) _____ , 『統一思想と世界観』, ソウル：図書出版　主流, 一念, 1991.
17) _____ , 『統一思想と学問』, ソウル：図書出版　主流, 一念, 1991.
18) ジャン・チョルス, 『韓国の冠婚葬祭』, ソウル：集文堂, 1997.
19) , 『韓国伝統社会の冠婚葬祭』, 京畿道：韓国精神文化研究院, 1984.
20) 全国大学原理研究会, 『統一原理教材』, ソウル：成和社, 1994.
21) ジョン・ジャンボク, 『教会力と聖書日課』, ソウル：大韓キリスト教書会.
22) ジョン・ジンフン, 『韓国宗教文化の展開』, ソウル, 集文堂, 1986.
23) ジュ・ジェヨン,『先儒の祭事思想と祭事問題』, ソウル：カトリック出版社, 1988.
24) チェ・ビョンファン, 『哲学の諸問題と統一思想』, アサン：鮮文大出版部, 2005.
25) 統一思想研究院,『統一思想』, ソウル：成和出版社, 1999.
26) 韓国宗教学会編, 『死とは何か』, ソウル：図書出版庁, 2001.
27) 韓日宗教研究ホーラム運営委員会,『宗教と儀礼』, 水原：ハンシン大学, 2005.
28) Arnold Van Gennep, *THe Rites of Passage*, Chicago : University of chicago press, 1960.
29) Catherine Bell, *Ritual Theory - Ritual practice*, New York : Oxford university press, 1992.
30) Dom Gregory Dix, *The shape of the Liturgy (with additional notes)*, New York : The seabury press, 1982.
31) J.J Von Allmen, *Celehrer le Salut*, Geneva : Labor et Fides, 1984.
32) R. L Grimes, *Beginning in Ritual studies*, Columbia : the university of south Carolina, 1995.
33) Tom F. Driver, *The Magic of Ritual*, San Francisco : Harper collins, 1991